

初冬直まきで持続的稲作

J Aグリーンサービス花巻実験圃場の生育状況などを確認した初冬直まき栽培の生産者向け講習会



岩手大農学部とJ Aグリーンサービス花巻が連携して取り組む水稻の「初冬直まき栽培」の講習会は23日、花巻市鍋倉の実験圃場で開かれた。2025年産は収量が目標を超える成果を挙げた一方、4年目となる今年は雑草などの課題も報告された。参加した生産者らは、春作業の負担軽減につながる初冬直まき技術への理解を深め、実用化の可能性を探った。

岩手大とJ Aグリーンサービス花巻 実用化へ講習会

初冬直まき栽培は、本格的な冬を前に稲の種子を田に直接まいてそのまゝ越冬させ、翌春に発芽、苗立ちさせる新しい作型。慣行栽培では春に田起こし、種まき、育苗、田植えといった作業が集中する。初冬直まきは農繁期の労働力を分散できるため、限られた人

手でも農地規模の拡大を図りやすくなる。

同大によると、県内では八幡平市で6作目を迎えた農業法人を筆頭に、現在10の生産者が取り組んでいる。J Aグリーンサービス花巻は48㌥の圃場でひとめぼれを栽培、生存率を高めるためのコーティングを施した種子を25年11月に播種機で10㌥当たり10・6㍓まき、5月12日に出芽が始まったことが確認された。

講習会には生産者や農業関係機関、農機メーカーなどから約30人が参加。苗立ちがそい、順調に生育した圃場を前に、初冬直まき栽培の研究を率いる同大農学部の下野裕之教授らが生産技術の概要や注意点、他の経営体の失敗事例、実際の圃場作業などを解説した。

全国的に農業経営体数が急激に減少する中、1経営体当たりの作付面積は大幅に拡大している。講習では、持続可能なコメ生産やコスト削減に向けた有効な手段として初冬直まきを位置付けた上で、25年産は肥料設計の見直しなどが効果を発揮

し、同実験圃場が目標とする反収8俵を上回る8・2俵に上ったことなども説明された。下野教授は「初冬直まきは技術的にハードルが高いが、限られた機械とオペレーターで時間を有効に使えること、これまで手が回らなかった土地を耕作できることなどの大きなメリットがある。経営の幅を広げたり、安定させたりする選択肢として導入を検討してもらいたい」と呼び掛けた。

岩手日日新聞 令和8年6月24日（水）1面

※この記事は岩手日日新聞社の許諾を得て転載しています。

※無断転載・複写を禁じます



2026年
（令和8年）
6月24日
（水曜日）



地域とともに

岩手日日新聞社

一関市東台14番地37
郵便番号 021-8667

編集局 0191 (26) 4204

営業局 0191 (26) 5111

販売局 0191 (26) 5112

総務局 0191 (26) 5114

支社/東京・仙台・盛岡
中部(花巻)・水沢
支局/千歳・平泉

©岩手日日新聞社 2026
<https://www.iwanichi.co.jp/>